第2図 1936年11月10日三重縣三河湾佐久の島附近に於て
採集されたコクガン（左側のもの）7羽

い。肩羽の黒色は色うすくすゝけてゐる (smoky)。3列風切の栗色も鮮明でない。採集の月は不明であるが以上の色彩から判断して見ると恐らく秋か冬の始めであつたと考へられる。

過去の記録の中半分は採集の月が明かでないが分つてゐるものは12月中旬から6月中旬までの間である。それで今回の標本は恐らく12月以前に採集されたものではあるまいか。ツクシガモは冬は adult の色彩を呈するものであるからである。それで北方で繁殖するツクシガモが迷鳥となつて秋季に日本に到着するのは当然の事であり迷鳥の多くが若鳥である事も鳥類一般に知られてゐる現象である。

Résumé

Gives one specimen and one photo record of *Turdus celaenops* from Miye Prefecture, one photo record of several *Branta b. nigricans* from Mikawa Bay and one young specimen record of *Tadorna tadorna* from Kyoto market.

ヒバリミオホヨシキリの棲息環境に就て

Adaptability of the Lark and the Great
Reed-Warbler to their different habitats.

久野賢太郎

Kentaro Kuno

(1) 緒言

私が是から述べようとする「ヒバリとオホヨシキリ」と言ふ題名は一應内容

を明示して居ない事を冒頭申し上げて置く。それは正しくは「ヒバリとオホヨシキリの棲息環境が何の程度の変化にも耐え得るか」と言ふ長々しいものであるので簡略して表記題名とした。

扱て此の様にヒバリとオホヨシキリの地方的に特異な例を述べるに当つて、前者は相当数の例であり、後者は僅々一つの例であつて、棲息環境的に観た場合は同じ結果であるとするも、其の種類例数の相違から是を各別個に取扱ひ、論じて行く事とする。

(2) ヒ バ リ

(A) 観察場所……私が現住して居る愛知縣知多郡大府町大字長草は名古屋市の南方約20キロメートルで、知多半島基部の東側に面する、純然たる農村である。大字長草は6ヶ字よりなつて、東部2部落即ち五ツ屋と平手の中間に発達した五ツ屋田面と呼ばれる字五ツ屋東及字下石根の水田地帯である。

(B) 環境及び沿革……往時は海であつたと言はれるがそれは余程古い時の事で、それが証拠には現在海岸線に達するには此の地点から約8キロメートル下らねばならない。

^{みやいけ}宮池西方2キロメートルに水源を発する石根川は五ツ屋部落で一度南折し、再び東南に流れ^{くらながせがわ}鞍流瀬川に合流して居る。此の鞍流瀬川を東限に石根川を南限に、やゝ三角形の水田地帯は合流点の方向に傾斜度は概ね100メートルに對し60センチメートル乃至80センチメートルである。

附近水田地帯に比し土質は最下位であつたが、約50年前に乳牛飼育を始め其の牛糞肥料に依つて相当向上せられた爲、近年に於いては他の長草諸部落内の水田と其の優劣は變らなくなつた。長草に於ける耕地開発の歴史は約3世紀に渉る期間で、そんなに古いものではない。此の約27町歩前後の水田地帯中、私の観察地域は石根川北側の字下石根及び字五ツ屋東の両地域約12町歩を主体として居る。此の地域は全部水田で、夏季は水稻が作付せられ、冬季は麥類(主として小麦)、菜種、馬鈴薯の裏作付が(方言でムゲタ、即ち麦田がなまつたものと推定)行はれる。

此の冬季裏作付は極く最近から行はれたもので、元來は水田(周年水濕地で水がきれない)で、乾田は部落西方の字上石根に僅かな面積があつたに過ぎない。此の観察地である字下石根及び字五ツ屋東が冬季の本格的作付を実施する様になつたのは、大戰末期頃からと云ふから僅6、7年で所謂食糧事情が悪化にともなふ農民の努力に依つて其の60%から70%(晩秋初冬の降水量

に依つて左右せられる) 近く迄作付せられる様になつた。

環境については上記裏作付と他の重要なものは耕作道路と水田畦畔であるが、後者に就いては本文中に於いて述べる事とする。

(C) 此の地域の鳥類…… 現在迄に私の観察したものは10目19科34種で、

第1表 長草五ツ屋田面の鳥類 其の1.

番号	鳥 名	棲息の種類	棲 息 数	蕃殖の有無
1	ハ シ ブ ト ガ ラ ス	留 及 冬 鳥	多	×
2	ハ シ ボ ソ ガ ラ ス	〃	〃	×
3	ム ク ド リ	冬 鳥	〃	×
4	コ カ ハ ラ ヒ ワ	〃	普	×
5	ス ズ メ	留 鳥	多	×
6	ホ ヲ ジ ロ	〃	少	×
7	ホ ヲ ア カ	冬 鳥	〃	×
8	カ シ ラ ダ カ	〃	普	×
9	ヒ バ リ	留 鳥	〃	○
10	タ ヒ バ リ	冬 鳥	少	×
11	ハ ク セ キ レ イ	冬 及 旅 鳥	普	×
12	セ グ ロ セ キ レ イ	〃	〃	×
13	キ セ キ レ イ	〃	〃	×
14	モ ズ	留 鳥	少	×
15	セ ツ カ	夏 鳥	普	×
16	ア カ ハ ラ	冬 鳥	〃	×
17	ツ パ メ	夏 鳥	多	×
18	カ ハ セ ミ	留 鳥	少	×
19	ト ビ	〃	〃	×
20	チ ウ サ ギ	夏 鳥	普	×
21	ゴ キ サ ギ	〃	少	×
22	マ ガ モ	冬 鳥	普	×

番号	鳥 名	棲息の種類	棲 息 数	蕃殖の有無
23	カ ル ガ モ	夏 鳥	少	×
24	ド バ ト	冬 鳥	〃	×
25	キ ジ バ ト	〃	〃	×
26	チ ウ シ ヤ ク シ ギ	旅 鳥	普	×
27	タ シ ギ	〃	〃	×
28	イ ソ シ ギ	夏 鳥	少	不 明
29	タ マ シ ギ	〃	普	○
30	コ チ ド リ	〃	少	×
31	コ ア ズ サ シ	〃	〃	×
32	ク ヒ ナ	留 鳥	〃	○
33	ヒ ク ヒ ナ	〃	〃	○
34	ウ ズ ラ	冬 鳥	〃	×

棲息の種類及蕃殖の有無は此の地域を中心とした狭いものであるから、長草全体として観た場合とは多少相違する事となる。

第2表 長草五ツ屋田面の鳥類 其の2.

棲 息 の 種 類	種 数	蕃 殖 鳥		非 蕃 殖 鳥		不 明	
		種 数	百分比	種 数	百分比	種 数	百分比
留 鳥	10	3	8.8%	7	20.6%	0	0
夏 鳥	9	1	3.0%	7	20.6%	1	3.0%
冬 鳥	15	0	0%	15	44.1%	0	0
旅 鳥	5	0	0%	5	14.7%	0	0
計	34	4	11.8%	29	85.3%	1	3.0%

(D) ヒバリの生態……此の地域の夏季は水田であるにもかかはらず本種が周年棲息して居る。私は従来本種が此の様な環境に生活して居る事を知らない。

蕃殖期が終つた頃は 1—4 羽程度で行動して居るが、10月頃には 2—7 羽内外の小群を形成して行動し、それが翌年の 2 月頃迄続く。蕃殖期以外は此

の地域内を漂動的に生活し、冬季は其の行動範囲は可成り廣く、2キロメートル以上に及ぶ事は珍しくない。此の間の行動は水平飛翔で行はれる。短距離間の移動時は1—3メートルの高度で行はれる。冬季のそれは少し追つても可成り遠方に逃飛する。此の頃の移動飛翔は概して高く5メートルから80メートル以上に及ぶ事がある。移動飛翔の場合概して飛翔距離と飛行高度は比例した結果になるやうだ。

蕃殖期は4月上旬から6月中旬で、此の頃は此の水田地域は秋冬作、即ち裏作付がされて居る時期で、田植え直前迄には終る。最盛期は5月上旬から6月上旬である。營巢環境は私が觀察せる此の地域内の5巢例は何れも麦の作付せられた田圃で、馬鈴薯、菜種の作付けられた田圃では発見出来なかつた処から觀て其の大部分は麦の作付けられた田圃に營巢する事が多いであらう。産卵箇數3—4箇が普通である。

3月頃から11月頃迄は動物性食餌（昆虫類、くも類等）を主とし、冬季はひえ、稻の落穂、雜草種子を主として攝取する。嚴冬期の餌料の少い時期に氣候不順其の他の理由で麦の播種が遅れて此の時期に行はれた場合には本種が良く食害する事がある外、農家へ及ぼす作物の食害は殆どない。

蕃殖期の中心を持つた生活期に於ける一雌雄の本種だけの棲息密度は此の水田地域では約5,000平方メートルを1テリトリーとして居る。是を長草の他の耕地（畑、いはゆる乾燥耕地地域）に比較した場合は其の差は殆ど認められない。

水稻作付時期の6月下旬から11月の期間は、水田に水が貯溜されるので、本種が地上に目撃せられるのは耕作道路、水田の畦畔であつて、全地域の約6%に過ぎない面積内を此の期間の採餌地域として居る。

(E) 考察……此の大字長草字五ツ屋部落近傍の乾田としては、昔から部落西方の字上石根に約2町歩（約20,000平方メートル）の地域があるが、往時も現在も本種の棲息は全く見られないのである。それに比し此の調査地域である字下石根、字五ツ屋東では元來は水田地帯であるが、二毛作付が行はれてから僅に7年前後であるが、本種が水の貯溜される6月下旬から11月迄の期間をもつが長草及び其の近傍の草原、乾燥耕地（畑）同様に周年留鳥として棲息蕃殖を行つて居る。

此の短期間に其の棲息密度は周辺地域の畑、草原等と同程度迄に到達したと云ふ事は素晴らしい結果をもたらした。その原因は水田の裏作中は乾燥耕

地（畑）同様にある事で、水濕を耕作の便宜、收穫の増收と云ふ面から充分排水せられて、營巢環境に恵まれて居ると同時に地表は露出（一部）し昆虫其の他が食餌として充分ある事に基盤を置いて居る。

斯様に観て本種の此の例から推定される事は、小地域が散在してある場合には棲息環境としては適さないと云ふ事になる。やはり面積が或る程度以上にまとまつて居ると云ふ事が棲息環境としては絶対に必要である事が窺はれる。其の限界は私としては現在數的につかめて居ないが、前記字上石根乾田地域の約2町歩（20,000平方メートル）から推定する場合、此の字下石根及字五ツ屋東地域内の1テリトリーが約5,000平方メートルであるから4番ひが棲息し得る面積に相当して居る。是から観ても約5町歩乃至7町歩（約50,000—70,000平方メートル）以上に一地域内の面積がまとまつて居らないと面積の方面からの棲息條件ではなからうかと思ふ。何れにしても其の限界面積は種々なる條件に依つて變つて來るが、此の様な環境地域に於ては夏季及秋季の貯溜水の關係から採餌地域が全面積の6%内外と云ふ少い地域で行はれる爲に乾燥耕地の場合よりは廣い地域が結局必要となつて來るのであらう。

一方テリトリーの密度から観て是等の耕地全般が平均して1番ひ約5,000平方メートルと云ふのではない。人家の周辺地域は稀薄である事は当然で、其の密なる地域は約3,000平方メートルにある所がある。此の密なる地域は人家より100—150メートルを距てた處で、主要耕作道路、字五ツ屋及字平手をつなぐ縣道端は、此の道路から10—30メートルの空白地域である處から観て、人の頻繁に通る道路より人家に対する警戒が蕃殖期に於ては強い事になる。以上は蕃殖期の所謂中心を持つた生活期にある場合である。

秋冬季に於ては春夏季に比し棲息地域が安定して居ない。それは餌料と姿体をかくすに困難である理由に依るのであらう。麦作は乾燥耕地に比し、其の播種は此の地域では遅く、稻刈後12月上旬から下旬に涉つて行はれる爲、冬季間の其の成育は5センチメートルから15センチメートル程度にしかならない。此の様な環境から姿体は露出して居る爲、此の期間は本種の警戒性が一番高い。したがつて生活様式は小群形成と漂動的な生活で採餌、囀が行はれる。

本種は棲息場所に対する定着性は比較的に強い様である。夏季の水濕性環境と云ふ惡條件で採餌地域の狭小にも、充分生活さえ維持出来れば移動を行

はない処から推定出来る。

此の地域が再び冬季耕作（裏作付）が行はれなくなつた場合は本種が現在の様に蕃殖をするか何うかは現在迄の観察では私は判然と結論を下せない。

(3) オホヨシキリ

(A) 観察場所…… ヒバリ観察地域の南方で、平手部落北側向江裏川の南側沿岸である。

(B) 環境…… 此の附近では川幅は5メートル前後で、北側は堤防、南側は道路が東西に通じ、其の奥は人家になつて居る。川の中には葦、蒲が諸所にあるが、戦争以来肥料不足から葦は水面上50センチメートル前後になると附近の農家が刈り取り、此の様な事を数回繰返す爲、充分成育する事がない。

通路に面した所には男竹の木立が川沿ひに竝んで、約80メートルに涉つて発達して居る。樹長は5メートル乃至8メートルに及んで居る。

(C) 此の地域の鳥類…… 現在迄に私が此の川で本種を観察せる い地域に於いて4目8科11種を記録して居る。

此の中イソシギは今年8月上旬、当地方の鳥として始めて目撃せられたもので、今後の観察に依つて渡りの区分、蕃殖の有無は明らかになると思ふ。

第3表 向江裏川平手部落B地点の鳥類 其の1.

番号	鳥 名	棲息の種類	棲 息 数	蕃殖の有無
1	ス ヲ メ	留 鳥	多	×
2	ホ ヲ ジ ロ	〃	少	○
3	セ グ ロ セ キ レ イ	旅 及 冬 鳥	〃	×
4	キ セ キ レ イ	〃	〃	×
5	モ ズ	留 鳥	普	○
6	オ ホ ヲ シ キ リ	夏 鳥	少	○
7	ホ ヲ ア カ	冬 鳥	少	×
8	カ ハ セ ミ	留 鳥	〃	×
9	イ ソ シ ギ	不 明	〃	不 明
10	ク ヒ ナ	留 鳥	〃	○
11	ヒ ク ヒ ナ	〃	〃	○

註記……第1表及第3表中、蕃殖の有無欄中、○印は其の地域内の蕃殖種、×印は非蕃殖種である。

第4表 向江裏川平手部落B地点の鳥類 其の2.

棲息の種類	種数	蕃殖鳥		非蕃殖鳥		不明	
		種数	百分比	種数	百分比	種数	百分比
留鳥	6	4	36.3%	2	18.2%	0	0%
夏鳥	1	1	9.0%	0	0%	0	0%
冬鳥	3	0	0%	3	27.2%	0	0%
旅鳥	2	0	0%	2	18.2%	0	0%
不明	1	0	0%	0	0%	1	9.0%
計	11	5	45.4%	7	63.6%	1	9.0%

註記……第2表及第4表中百分比は何れも全種数に對する割合を示すものとする。

(D) オホヨシキリの生態……鞍流瀬川に向江裏川及石根川の合流する附近には川の堤防岸に葦の密生地がある爲、毎年数組が渡來蕃殖する。

此のB地点には往時葦の密生部があつた時代には2—3番ひが營巢したと言はれて居る。

今年此のB地点には1組が棲息して居るが(B)環境の項に述べた様に葦は50センチメートル前後に生育すると刈取られる爲、本種の營巢に適せない爲、もつぱら此の男竹林に棲息して居つた。私が今年此の地域で発見したのは7月上旬で、其の以後数回訪問するが、雄は6メートル以上の竹の頂きに止つて囀鳴して居つた。

營巢個所は此の竹林の上部(目測5メートル)の竹の幹と其の枝の出た基部に造られてあつた。

(E) 考察……此の様に葦と云ふ主棲息環境がやゝ破壊に近い迄にされた場合に同じ禾本科植物とは言へ5メートル以上8メートルに渉る高さの場所に移動棲息すると云ふ事は本種本来の生活様式ではないが、此の様な環境にも營巢すると云ふ適應性があると云ふ事を知つた。是が唯私の1棲息期間のみの觀察であるから判然と結論は斯うであると断定する事は出来ないが、今後の觀察に依つて纏め度いと思ふ。

尙ほ山階博士の「日本の鳥類と其生態」Vol. 2, p.168-172 本種の習性の項にも「本州中部以南の低地では、湖岸、河岸、濕地等の葦の中に多く、乾燥

した叢中には殆ど之れを見ない。尤も之れ等の葦原の中に灌木や藪のある場合に、雄が其の様な樹木の中で囀つて居る事は屢屢見る所であり、又春の渡り際には林の中の喬木の上に止つて囀つて居る事も稀ではない」と云ふ様に述べられてある。

(4) 摘 要

(A) 私は鳥類の棲息環境が或る変化に対し、強い適應を示す事をヒバリ及オホヨシキリに就いて知つた。是を具体的に以下摘記する。

(B) ヒバリは從來此の附近では乾燥耕地、草原等に棲息して居たが水田地域でも蕃殖期に排水され乾燥地であれば他の時期(6月下旬—11月)には水湿地であつても本州中部地方では其所に周年棲息する事を知つた。従つて本種の環境に対する定着性は強い。

(C) ヒバリの棲息地域としての面積の限界は 20,000 平方メートルよりは大きく 120,000 平方メートルよりは小さい事を此の様な觀察地域に依つて知つた。私の推定では 50,000 乃至 70,000 平方メートル以上に面積が 1 箇所に纏つて居れば本種の棲息が可能であると思ふ。

(D) ヒバリが此の様な地域に侵入分布して過去 7 ケ年を経過した。此の觀察地域の周辺乾燥耕地(畑)の棲息密度と現在此の地域のそれとは殆ど其の差はない。此の地域に於ける蕃殖期の 1 テリトリの面積は平均約 5,000 平方メートルを 1 番ひが占有して居る。

(E) 分布状態は人家から 100 メートル乃至 150 メートルの地域で、人の往來する道路では 10—30 メートルである処から觀て、道路よりは人家に接近して營巢する事を警戒する。

(F) オホヨシキリの棲息環境が從來川の中に生育して居つた葦の密生した処であつたが、種々な原因から現在是が充分成育し得ない爲附近の乾燥地である竹林に移動營巢して居る。竹林の樹頂は 5 メートル乃至 8 メートルに及んで居る。

Résumé

Observations were made at Ofu village, 20 km. south of Nagoya City. *Alauda arvensis japonica* can remain as resident in a field which, during the non-breeding season, becomes a wet paddy field.

It appears that the Lark can live in a field of 50,000 to 70,000 square metres. The density of population in this seasonally inundated ground is much the same as that

found in the adjoining dry ground. It breeds 100 to 150 metres away from houses but, only 10 to 30 metres from the road. *Acrocephalus arundinaceus orientalis* usually breeds among reeds but if the reed no longer grows, the Great Reed-Warbler moves to nest in a nearby dry bamboo forest of 5 to 8 metres high.

カウライキジ換羽及滞棲地移動に就て

Notes on the Moults and Movements of the Korean
Ring-necked Pheasants, *Phasianus c. karpowi*.

黒 田 保 吉
Yasukichi Kuroda

緒 言

昭和九年(1934)朝鮮総督府山林局長として渡辺忍氏就任あり、野鳥類保護に付て府令を以て各道に禁猟区の設置発令あり。当時拙者忠清北道に於ける調査設置に付て囑託を命ぜられ、俗離保安林地域(一般鳥獸類に対し)清州郡美湖川・無心川合流点を包容せる平野一帯(主として雉の繁殖及鴨・雁・鶴類の停滞地として)二ヶ所を設置せしが、爾來雉の繁殖及氣候の変遷に対する換羽・餌料等の変化を毎年の氣象溫度表を基準として調査し、大要完成せしも戦時中氣象の発表禁ぜられ遂に其の儘保存せしが、終戦後引揚に際して是等資料外、在鮮30余年間(1910—1945)の諸調査資料等も携持荷物と共に釜山港にて没收せられたれば、遺憾ながら其の大要に付て報ずる次第なり。

朝鮮に於ける大陸寒波の襲來及其の影響

大陸奥地高氣圧の中秋より初冬に及ぼす影響は甚大なるものにして、地形南北に狭長にして黃海を挾して大陸に対位せると全鮮熱反射強烈なる花崗岩質の地帯の分布廣大なる事は其の要素たる可し。秋冬季に於ては其の影響緩和なるも、春季に至りては黃塵を伴ふ強風順次増加し、2月下旬より4月上旬に亘りては風向約北西の所謂黃塵季に入る。其の起因たるや地球地軸の23.5度傾斜と地球位置の変遷に伴ひ太陽直射角度の増加は惹いて花崗岩地帯及山嶺部の傾斜面の反射に甚大なる変化を惹起するに至る。以上の状態にありて中秋初冬の氣溫の降下は特有の三寒四溫日和となるも、其の変化は極め